徳川斉荘の岐阜御成

伊奈波神社教学研究員　筧　真理子

関ヶ原の合戦後に岐阜町は城下町でなくなり、幕府直轄領を経て元和五年（一六一九）尾張藩領に組み込まれました。歴代の尾張藩主は、ほぼ一代に一度は岐阜町を訪問して宿泊し、これを「岐阜御成」と呼んでいます。尾張藩は美濃国内に約十三万石の所領がありましたが、定例として藩主が訪れた美濃の地は岐阜町だけです。滞在中は鵜飼観覧や稲葉山（金華山）での鹿狩りなどを楽しみました。金華山上からは美濃・尾張の領国を一望でき、藩主にとって絶好のロケーションでした。しかし、岐阜御成は単なる物見遊山ではなく、加納藩主・彦根藩主・旗本坪内氏らの挨拶、岐阜町周辺や沿道地域の領民の御目見などもあり、政治的デモンストレーションの意味合いも持っていました。

本稿で取り上げるのは十二代藩主である徳川斉荘（一八一〇～一八四五）の御成です。尾張藩は家康の九男である義直に始まりますが、九代宗睦でその血統は絶え、その後はあい次いで養子を迎えました。斉荘と先代藩主斉温はともに将軍家斉の子で、異母弟である斉温の死去により斉荘が尾張藩主となったのは天保十年（一八三九）三月、二十九歳のときです。高須藩主の次男を藩主に推す尾張藩家中には幕府の「押し付け養子」に対する反発が強く、批判の槍玉に上がった付家老の成瀬正住が一時犬山に引きこもるほどでした。

こうした騒動の中に斉荘は尾張に入国し、天保十三年に「来年は犬山・岐阜・瀬戸へ御成をし、都合によっては知多郡へもお出かけになる。これはお慰みではなく御国巡覧である」と通知されました。斉荘以前の二代は岐阜御成がなかったので、寛政三年（一七九一）以来の約五十年ぶりです。天保十四年九月一日に御成の予定が天候の加減で延期され、九月二十一日から二十四日にかけての三泊四日で行われました。当初予定の九月一日のために召集された村方人足は待ちぼうけとなったのですが、円城寺村（羽島郡笠松町）に集められた人たちは竹矢来に詰め込まれて難儀したようです。岐阜市柳津地区には、「青竹矢来を結いつめて　中へ押し込む人足はその数知れずあまたなり　時に八月晦日の夜　困りし人はかごの鳥…」という囃し歌が残されています。八月中には道筋・宿所などの下見分や鵜飼の予行演習が行われ、岐阜町内では役所や御宿の修繕、道筋の整備、通路の照明の手配、河原の休憩所設置などで忙しい日々が続きました。このときに随行したのは、名簿に載っている藩士とその家来だけでも一二〇〇人を超えています。御目見する人たちや見物人、人足として動員された人々を含めると、人口五〇〇〇余りの岐阜町が倍近くにふくれあがる状況だったと考えられ、その宿所・食材・調度品などの準備だけでも大変なことだったと想像されます。加えて、九月十一日には大雨による洪水で長良など各地で堤が切れ、せっかく準備した休憩所は流失し道筋も荒れてしまったため、その修復もしなければなりませんでした。また、水運の幹線ルートである長良川でも御成前日から帰城までは原則として通船や筏流しが差し止められました。

九月二十一日、徒歩の斉荘を中心にした大行列が岐阜町に入ってきたのは日暮れ時でした。いったん宿所である賀島勘右衛門家（岐阜市米屋町）に寄ったのち、船で対岸の長良へ渡り、酒造家で富豪の黄池金右衛門が準備した休憩所（現在の長良川うかいミュージアム付近）に入り、そこから乗船して鵜飼を観覧しました。掲載写真は、このとき随行した御用絵師の狩野晴真が描いた「長良川上覧鵜飼図」（岐阜市歴史博物館所蔵）で、上部に貼ってあるのは斉荘筆の短歌短冊です。二幅に二十一艘の鵜舟が円弧を描くように連なり、その中心には藩主の御座船が想定されています。当時の鵜匠は長良七名・小瀬五名でしたが、十七世紀初頭には合わせて二十一名だったと伝え、この上覧鵜飼もかつての人数によったものでしょう。観覧後は船を中河原へ着けて河原の休憩所に入り、鵜飼で獲れた鮎を素材にした石焼鮎を食しました。宿所へ戻ったのは、真夜中をかなり過ぎてからのことでした。なお、河原には見物人が集まりましたが、斉荘の許しが出たため規制縄を外して自由に拝見することができました。

二日目は金華山登山ののち千畳敷と御鮨所（鮎鮨の調整所）を訪れ、妙照寺で休息。昼から岐阜奉行所で岐阜町特産品である岐阜縮緬の機織のようすを見て、伊奈波神社に参詣し、さらに権現山に登りました。

三日目は岐阜町を順覧し、斉荘の急な希望で西材木町の材木商丹羽与三右衛門宅へ立ち寄りました。このち船で対岸に渡って黄池金右衛門の別荘で昼食と詩歌の会、その向かいにあった本宅で茶を楽しみ、続いて先日の洪水による破堤場所を視察。再び川を渡って板取村の乗手による角材乗り・鵜の餌飼・網漁を見物、ようやく日暮れ前に馬で宿所へ戻っています。この夜、水害被災者一五〇人へ金二〇〇疋（銭二貫文）ずつが斉荘から与えられました。

四日目は朝八時ころ岐阜を出発、名古屋に帰城したのは夕方でした。四日間、かなりの過密スケジュールだったことがわかります。なお、普段は自由な立ち入りができなかった金華山ですが、慰労のためか御成後の三日間は岐阜町周辺の領民に入山見物が許可されています。

御成ののち、斉荘は見聞をもとに紀行文をまとめました。残念ながら伊奈波神社参詣については触れていませんが、金華山登山のとき達目洞について「稲葉大神古縁起に見えたる古き池なり」と書いています。この「稲葉大神古縁起」は社宝の「美濃国第三宮因幡社本縁起」のことで、祭神のイニシキイリヒコノミコトが因幡大菩薩として祀られてから約五〇〇年後に百済から難行という僧が当地を訪れ、霊地と感じて千日の勤行をしたところ、「我が体を見んと欲するなら当山の東にある大池、達目の池を訪れよ」と夢告を受け、白雲に乗って姿を現したミコトたちに会えたことが記されています。斉荘は伊奈波神社の縁起について知っていたわけで、岐阜奉行から情報を得たのかもしれません。同じ紀行文の末尾には「三日あまりこの里にありしに、興さらにつきず、心をのこすばかりなり」と書いています。実際に斉荘は岐阜町がかなり気に入ったようで、名古屋や江戸で岐阜町のことを吹聴したといい、二ヵ月後には再び遠乗りで訪れました。しかし、この後は幕末の政情多端な時期となり、尾張藩主の岐阜御成は斉荘が最後でした。